

讃美歌が子守りうた

松 隈 協

母が召されてまもなく3年になる。私の母は、幼児教育、キリスト教保育の世界では有名人だった。テレビで講演会の宣伝がある程だった。それと引き換えに、母は家にあまりいなかった。私の家には、川崎のおばちゃんという当時は珍しい「お手伝いさん」がいた。授業参観も、スーパーまで手をつないで歩いたのも、川崎のおばちゃんだった。母を「先生」と仰ぐ人は「あなたのお母さんは家庭と仕事との両立のために無理をして、透析する程になってまで、あなたのことを愛していたのよ」と言われると思う。それは本当だろう。しかし子どもだった私は、さみしさの方が勝り、母の愛が分からなかった。子育て講演をしている母が特に嫌いで、さみしさが爆発した私は、母に「言っていることとやっていることが違うじゃないか」と泣き叫んだことがある。母は、泣き叫ぶ我が子に一言、「私の仕事は理想を語ること。理想がないとこの世界はだめなの」と言った。何も言えなかった。

母はどんな思いで子育てをし、どんな家族を作りたかったのだろうか。遺品を整理している中で、母が大切にしていた聖書の注解書に付箋がついてあるのを見つけた。そこに家族についてこうあった。「本来家族は、創造主なる神が御自身の子たちに、神のイメージを正しく伝達するために設定された最少の単位である。」母の作りたかった家族は、そのような家族だったのだろう。もう一つ、母が自身の人生を振り返って書いた文章にこうあった。「私の両親は共働きで、今の鍵っ子のはしりでした。（中略）子ども時代、私が母から学んだものは、理想の母親像ではなく、理想の教師像であったと思います。けれども子育てを終えた今、考えてみると、私もいつの間にか母と同じような子育てをしていました。もし私に母を超えるものがあつたとすれば、それは多くの歌や物語に加えて、讃美歌を子守うたにし、聖書のお話を子ども達に語り聞かせたことだと思います。三人の子ども達は幼い時から神さま、イエスさまを友達のように身近に感じて育つことができました。」母は私に讃美歌を子守りうたに、聖書のお話を寝物語にして、神のイメージを伝達してくれた。親子らしい思い出は少ないが、確かに私は神のイメージを受けとった。

昨秋、私の二人の娘が洗礼を受けた。母が伝達してくれた神のイメージが、娘たちにも確かに伝達された。

（高等部宗教主事）